

## 凡 例

●項目分けに関してはまず季節を8つに大別して章を構成し、ついで、筆者の独断と偏見で、関連性のある植物群を中別してタイトルを付した。そしてその中別した項に含まれる植物群には、一つずつ植物名を記して解説した。各ページの左肩に記された01-01-01-1は最初の01が季節を、次の01が関連性のある植物群を、次の01が植物名を、最後の1がその植物が記されたページ数になっている。

●本文で植物そのものにかかわる記述はすべて墨色とした。また植物とは直接関係ないものでも古典的な文学等で、かかわりの深いものは墨色とした。

●植物から脱線した歴史や文学の詳述、音楽の歌詞等はこの色で表現した。

●関連項目や詳述が、他ページにある場合にはそのページを赤で記しリンクした。

●戦記物等で敵味方が交錯して分り難い部分では味方を緑で表したときには、この一族をすべて緑系の濃淡で表すように努め、人物名は細かく色分けして出来る限り整理しながら読み取れるよう配慮した。また男性は寒色系で、女性は暖色系とした。しかし登場人物が多過ぎたり、諸般の事情により、この通りに行っていないところもある点をご容赦いただきたい。

●植物の専門用語に関してはこの色を用いて、各セクションの下に簡単な解説を加えた。また再出したときにはページを付記してリンクするよう配慮した。

●黄色の帯はフォントにないための当座の仮文字とした部分である。また今後さらに事実確認を必要とするものに対してもこの色を用いた。

●植物の専門用語、関連用語でも、ちょっと専門過ぎるものに関してはこの色で表記し、この中で詳述することは避けた。

●巻末で表にした資料集に含まれる古典的な書物に関してはこの色で表記し、リンクした。

●ちょっと気になる植物や文学等にかかわる専門的な用語はこの色で表記した。

●桜と椿の項で、かなり趣味の世界によったものを表記するときにはこの色を用いた。興味が持てなかったら飛ばしていただければ幸いである。

●この他にも注意を喚起するために、この色をつけた部分もある。

★見ようによっては煩雑ではあるが、色分けすることによって、選択的に読んだり、重点的に読んだり、漢楚攻防などでは敵味方をはっきり識別できて、理解しやすくなったと自画自賛している。デジタル書籍は単なる小説よりも、こんな馬鹿な脱線本や推理物、そしてとりわけカラー写真の多い書籍にはうってつけのように思う。とことん試行錯誤を交えながら色を付けてみた。目障りであったらこの場を借りて陳謝したい。

[目次に戻る](#)

## 後 書 き

『花の縁』を書き始めた頃、世の中はやっとワープロなるものが登場して、10字前後の文字を活字のように打ち込むことができるようになった。東芝から『ルポ』と言う普及機が発売されたのである。ちょうど中国から今にも沈みそうなボロ船に乗って、ボートピープルが日本を目指してやってきた頃のことである。それと同じ頃パソコンなるものが秋葉原の電気店で発売されるようになったが、必ずしも一般的なものではなく、50万円以上もする代物で、我々庶民にはとても手が出なかった。携帯電話が出始めたのもその頃のこと、バッテリーを背中にショって歩くほど大きくて、通話ができるものの利便性からすれば、公衆電話の方がずっとましだった。

それがこの20年のあいだにパソコンは誰もが、家庭でも職場でも使うものとなり、さらに携帯だのデジカメだの写メールだの、さらにはアイポッドだのアイパッドなど、スマートフォンだの、オジサン族にはなかなかついていけないような新兵器が次々と登場し、次に登場するのはパソコン&フォンであるような状況である。もはや印刷メディアは風前の灯になろうとしている。技術革新の物凄さに、ただただ驚嘆するばかりである。

さて『花の縁』を書き始めた当初は一つの植物の資料データを集めるには図書館以外に手立てはまったくなかった。小学館から出版されていた『日本國語大辞典』や、講談社の『日本大百科全書』、さらには同じく講談社の、『四季花暦』などのコピーをとって、家に持ち帰り整理して1ページを作るのに1週間ぐらいかかることが多かった。それでやむなくこうした書籍を古本で揃えて、出窓に並べたから間もなく窓は開かなくなってしまった。ところが最近ではこうした資料はネットで検索すればほとんどのものが瞬時にチェックできる。便利な時代になったものである。

しかし相変わらず変わっていないのがマイクロソフトのワードと言うソフトである。パソコンに向かって、『もっと日本語を勉強しろよ』と怒鳴りたくなることが毎日のように起こる。最悪最低のソフトである。しかし別な見方をすれば、この日本語の特異性と難しさゆえに、多くの外国人から日本という国が理解されずに、悪しき習慣も、またよき慣例も日本国内で温存され、同時にマスコミが海外からの攻勢にも超然としていられる原因にもなっている。有難いことではあるが、その一方では大変残念ながら、過保護のもと競争力をまったくなくしてしまった日本の農業にも似ている。今後のパソコン技術の進歩は、日本のマスコミを揺るがすだけでなく、全世界をも動揺させることは必至であろう。しかも今の時代はすべてのものがリアルタイムで進行しないと満足できないご時勢である。リアルタイムではないドラマ等は録画を見れば済んでしまう。かつての月曜、木曜のドラマ戦争なんて今や昔の物語である。新聞社においても悩みは等しい。もはやネットには時間的には対抗できない。しかも足で探す記事はもはや限界がある。このため共同通信社や、時事

通信社の記事をそのまま乗せていることも少なくない。先日電話で記事の質問をしたら、「これは〇〇社さんからの記事でして…」といわれてしまった。記事に対する責任の所在さえ、はっきりとしない時代になっているのである。

いつもの癖でまた脱線したが、何が言いたかったかと言えば、この最悪のワードと言うソフトのために、制作の過程で、漢字への変換にすこぶる手こずったと言うことである。今にして思えば、日本語をよく理解していたワープロ時代の『一太郎』が懐かしい。長い文章を入れると、ほとんど間違いなく正しい日本語に変換してくれた。日本語をよく勉強していたのである。

しかしその最悪のパソコンのおかげで、この『花の縁』がまがりなりにも完成できたことも確かである。写真の挿入も簡単にできるし、フォトショップとの互換性や、写真の拡大、縮小、輝度のアップや、彩度の修整など、少々のことならワードの中で行なうことができたから、写真に関しては、かなり効率的に行なうことができた。20年前にはまったく考えられなかったことである。

さてパソコン音痴だった筆者にこの技術的な指導をして下さったのは東京都大田区にある川島写真機店の諸兄や金子氏だった。特に金子氏はパソコンは仕事とは無関係な分野であるのに天才的に詳しく、いろいろと教えて下さった。こうした師がいなかったら、この『花の縁』も完成することはなかっただろう。しかしそれにも増して小生にパソコンの入力作業を親身になって取り組んでくださったのは、KDDIのau 安心サポートサービスの諸兄であった。そして筆者に農業関係、特にトマトやキュウリ、ナス、カボチャなどの栽培方法や、おいしい果実の見分け方などを懇切丁寧にお教えくださったのは、群馬県高崎市吉井町片山の横尾さん御一家、埼玉県深谷市で栽培農家を営んでいらっしゃる内田さんご夫婦で、さらに春の七草や雑草、雑木類の知識を与えて下さったのは倉持通夫先生（日本植物友の会参与、狛江植物同好会幹事）だった。そして最後に『桑と蚕』の項で、群馬県周辺の古い蚕屋敷や煉瓦の建物などをご案内下さったのは高崎市に在住の横尾絃子さんだった。お陰でよい写真が撮れたと思う。皆様に感謝してやまない。また初期の段階でこの企画そのもののチェックを入れ下さったのは日本放送出版協会の諸兄、デジタル書籍に関する知識を色々と授けて下さったのはエイター(株)札本裕治社長と、中央公論事業出版社の佐藤咲氏、出版に関してさまざまなアドバイスを下さったのはブックストラテジーサービスの豊田社長を初めとする、小尾氏や湊氏などの諸兄であった。皆様のよきご指導があって、この『花の縁』を完成させることができたことを感謝してやまない。この場を借りて心より御礼申し上げるしだいである。

[目次に戻る](#)

## 【著者略歴】

本名は、藤井 建（1943. 11. 27 生まれ）  
早稲田大学第一文学部卒業後、広告会社に入社。  
クリエイティブ局にてコピーライターとして、  
ヤマハ発動機、三越などのキャンペーンに携わる。  
その後営業局に異動して大林組、フジテレビ等の  
アカウント・エグゼクティブを務める。

1996年には大林組の日経広告賞受賞に寄与する。  
フジテレビ局『楽しくなければテレビじゃない』  
の時代に、バザールでゴザールや団子三兄弟の  
佐藤雅彦氏、ソフトバンクでおなじみイヌのCMを  
製作している佐々木宏氏とともに、『哲学』で  
カンヌ国際広告フェスティバルにて広告賞受賞。  
その後、佐々木宏氏、タグボートの岡康道氏と  
フジテレビのお台場移転キャンペーン等に携わる。  
電子書籍『仔猫こもらった91日間の幸せ』がある。



山田案山子のアドレス：[takeru07@ab.auone-net.jp](mailto:takeru07@ab.auone-net.jp) お問い合わせ等はこちらまでお願いします。

[目次に戻る](#)

## よきアシスタント

この撮影中、小生と行動をともにしたのはこのジュン♂である。長野県佐久市の駒場公園で拾ったのがジュンとの最初の出会いであった。生後1ヶ月も経っていない頃で、2001年6月3日のことである。それでジュンと名づけたのだが、筆者にはすぐになついて、クルマに乗ることも厭わなかった。シャムとアメショーのハーフで、純血種でなかったために捨てられたらしい。以来、クルマの助手席に乗って、北は仙台から南は徳島まで、毎回撮影旅行の助手を務めた。彼の走行距離はおそらく5万キロ程度になるだろう。乗鞍岳のふもとで一緒に星空を見たこともあったし、上高地で河童橋を渡ったこともあった。それに戸隠神社の参道を一緒に歩いたこともある。一度、銀座の歩行者天国へ連れて行ったが、さすがに人の多さにびっくりしてか、植え込みにもぐりこもうとすることが多かった。しかしいつでも筆者の後を着いて歩き、滅多にはぐれることはなかった。それでも3度ばかりはぐれそうになったが、すべて5時間後には、どこからともなくクルマに戻ってきた。猫の体内時計は5時間刻みになっているのかもしれない。しかしそのたびごとに車の中で一晩明かす覚悟を決めていたことも事実である。

ジュンは特に波の音が嫌い、海では背中によじ登って来る事が多かったから、どこへ連れて行っても人気者で、人を恐れたり爪を立てることもなかった。房総海岸あたりでお会いした方も多かったと思う。あれから10余年、もうお互い老人である。今ではジュンを看取ってから他界したいものと思っている。



ジュンはもう 2017 年 6 月で 16 歳になった。いまだにパソコンの隣で、小生の作業を見守っている。